

時はヘブン移民歴五百十九年。一日が二十時間、一年が三百五日で過ぎていくこの星で、もともと穏やかな四の月だった。「南紅大国」の王、嵩原天人は、最愛の正妃シオン・ド・オルレアンのと股に頭を乗せ、広々とした縁台の上で、うとうととうたた寝を楽しんでいた。

隣国の男でありながら、この国の正妃となった美しきシオンは、優しく天人の髪を撫でていた。爽やかな風は天人の衣の裾を乱し、はだけた胸元からほどよく熱い体温を奪っていた。

国の南に位置する王宮の辺りは、この季節を過ぎると、日々暑さが増していく。今はすべてがほどよく、とても過ごしやすいので、いつもは働き者のこの国の男達ですら、こうして怠惰な時間を楽しんでしまうのだ。

天人とシオンの世話係となっているロボットのタウとマウも、羽を休め、寄り添ったまま目を閉じている。ただ機能停止しているだけなのに、その姿は眠っているかのようにだった。

警護ロボットのソラだけは、海上を見つめてじっと立っている。ただ佇んでいるだけのように見えるが、ソラはあらゆる通信網から情報を受信しており、この王宮に害が及ぶ情報を得た場合は、すぐに天人とシオンを守るために動き出すのだ。

じっとしていたソラが、いきなり天人の部屋の一番高い場所にある、望楼に駆け上った。その様子を見ていたシオンは、思わず抱いていた天人の頭を守るように、腕で押さえってしまった。するとその緊張感が伝わったのか、天人はゆっくりと目を開ける。

「どうした、シオン」

「何でもありません……」

ソラが緊急事態宣言を発しないからには、何もない筈だ。そう思っていると、ソラはふわりと望楼から飛び降りて、天人の前に近付いてきた。

「船籍未登録の船舶三隻が、港に向かって進んでおります。海洋警護隊の巡視艇と、海軍の中級護衛艦一隻が、警戒のために伴走しております」

「んっ……未登録？ しかも三隻か？」

「はい、ご覧になりますか？ 緑色の旗を掲げておりますが、『南紅大国』では見かけないものです」

そこでソラは、掌ほどの透明なボードを取りだし、そこに自分が見たものを再生した。天人はそれを覗き込むと、シオンに向かって笑った。

「何とも趣味の悪い船だな。黒に近い緑の船体に、緑の旗だ」

「スキヤンいたしましたが、砲台を備えております。ただの船舶とは思えません。どうやら軍艦のようです」

タウとマウも起きだして、不安そうにソラの周りをばたばたと飛び回る。

するといきなり爆音が響き、皆は一斉に海上へ目を向けた。

巡視艇が攻撃されたのかと思つたら、空中に白い煙が広がっているだけのようだ。

「ご心配なく。空砲です」

ソラはすぐに報告する。

「祝砲代わりのつもりで、いきなり派手な空砲か？ しかしおかしなことをする輩だ。たつた三隻で、我が国の海軍に立ち向かうつもりなのだろうか」

巡視艇から何も報告がないということは、相手にはあからさまな敵意はないということだ。けれどかなりの大きさがある船で、船籍登録もされていないのに、堂々と首都の安保港に寄港する意図はなんだろう。さすがに天人ものんびりとは構えていられなくなつたようだ。

「いい気持ちで寝ていたのに、珍客のせいで起こされたな。いったい何者だ？」

「……ただいま、交信がありました。『西緑神国』国王、アスマ・イザナギと名乗っております。陛下に謁見を申し込んでおりますが」

ヘブンにあるのは、南紅大国と北青王国だけで、そんな国はない。シオンは思わず天人を見つめて、疑問の答えを教えてくださいとおうと思った。

「陛下……」

「そんな国などないと思つたんだろう？ 我が国は、大きな島を中心に領土を分割し、それぞれの地域の議員達による自治政治を行っている。その中には……自らを王と名乗りたいという者もいたことだろう」

「それにしても、わざわざ国王を名乗るといふのは、おかしくありませんか？」

「ああ、おかしい。すぐに調査開始だ」

天人は立ち上がり、ゆつたりとした部屋着から、謁見用の正装への着替えをタウとマウに命じた。

タウとマウは顔を真っ赤にして、高速で飛びながら衣装部屋に飛び込む。

「陛下、同行をお許しください」

不安になると、シオンは天人の側を離れたくなるのだ。それを知って天人は、困つたような顔をする。

「何を考えているか分からぬ相手だ。本当は許可したくないが、駄目だと言つても、どうせシオンは付いてくるんだろう？」

「はい……まいます」

シオンが立ちあがると、タウとマウはますます忙しくなつた。シオンの衣装も用意しないといけない。二人はいかにも相談しているかのように見つめ合い、天人とシオンが最高に美しく見える衣装を選び始めた。

はるか昔、母なる星・地球を飛び立った宇宙移民達は、この星へブンに降り立った後二国に別れた。コンピュータ「イブ」が統治する「北青王国」とコンピュータ「アダム」が統治する「南紅大国」だ。

暴走を始めたイブが廃棄された後、「北青王国」を管理しているのは、新しく創られたコンピュータ「モーゼ」だ。モーゼとアダムの関係は良好で、一時は戦争状態となつた両国も今は友好国となつた。

『北青王国』の新王レナードは、シオンの異母兄であり、天人とも仲がいい。レナードが王でいる間は、二国間に何の問題も起らないだろう。

両国とも、それぞれのコンピュータが経済を管理している。流通のすべてが電子マネーで行われ、かつての地球に用いられていた貨幣というものは存在しない。コンピュータによって、個人資産すべてが管理されているのだ。

普通に暮らしていくためには、個人情報をもコンピュータに登録しなければいけない。生産物による利益、労働に対する対価は、電子マネーで支払われる。

この星で生産され、消費されるものすべて、ロボット一台から水陸両用車、キッチン用レンジまで、あらゆるものがコンピュータの管理下にあった。

つまり、本来なら船籍登録のない船など、ありえないものなのだ。誰がどれだけの金を使い、どこであれだけの船を造ったのか。他にもまだ戦艦などあるのだろうか。そこが天人にも引つかる。

謁見の間に設えた玉座に、天人はシオンと並んで座った。相手は武器の携帯を認められていないが、それでも用心のために、玉座の周りにはシールドが張られている。信頼出来る者相手なら、当然シールドなどは張らないし、もつと危険そうな相手だったらそもそも謁見など行わない。

実は天人は、この不思議な訪問者に会うことを楽しみにしているのだ。自ら王と名乗るなど、何と酔狂な男だろう。船を三

隻も所有しているからには、それなりに力のある者だろうが、各諸島を司る議員の中に、アスマ・イザナギなどという名前は無い。

どうやら『北青王国』との戦いに明け暮れていた間に、天人の知らないところで何かが進んでいたようだ。

自ら王と名乗った異端の男は、三人の随臣を伴って現れた。そのうちの一人は女性で、目を惹くほどの美女だ。

妙な衣服を纏っている。白い布で作られたシンプルな物で、腰に巻いた帯で縛っているが、その上にお揃いの緑の袖無し上着を着ていた。

男達は漆黒の髪を真ん中から二つに分け、耳のあたりで左右に束ねている。女は長い髪を頭の上で丸め、宝玉を飾った髻で留めていた。

足に履いているサンダルは、革製の質素なものだ。装飾品はほとんどなく、首からそれぞれ革紐に獣の牙を加工したものを下げをぶら下げている。天人にとつてそれらは、初めて目にするものばかりだった。

四人は天人の前で床に平伏する。そして真ん中にいた若い男が名乗りを上げた。

「南の大王……初めてお目にかかる。我は『西緑神国』の王、アスマ・イザナギと申す」

「挨拶は快く受け入れるが、そのような国がこの星にあることを知らない。いつたい、いつ建国したというのだ？」

「建国は今より、三年前」

「三年前？ で、どこが貴殿の領地なのだ？」
天人は苦笑いを浮かべていた。何だか子供の王国ごっこに付き合わされているような気分になっていたからだ。

アスマはまだ若く、どう見ても二十代の前半といったところだろう。付き従う随臣も、皆、同じような年頃だ。

アスマはすぐに天人の嘲笑に気付いて、床に座ったまま真っ直ぐに天人を睨み付けた。

「南西の海域、竜が棲まう地域だ」

そこで挑戦するように、アスマは言った。

「彼の地は、もう何百年と人は住まぬ。我が父、アシハラ・イザナギは、竜を制御して人が住まう地に変えた。どちらの国も所有権を放棄した土地だ。何も問題はなかるう」

「ほう……あの竜の生息地か」

さすがにこれには天人も驚いた。天人も南西海域を訪れたことはある。弟のアーサーが、ロボットのアダムと駆け落ちしたときに、南西海域に行ってしまったからだ。アーサーの高速艇が座礁し、何とか救出したものの、竜のいるその海域は屈強な随臣や、最強の護衛ロボットのいる天人ですら、かなりの危険を覚悟しなければいけなかった。

ヘブン移民当初は、それでも観測基地を設け、何とかこの星の竜の実態調査は行われていた。けれどあまりにも危険が多く、人的被害が出ることを恐れ、屈強な『南紅大国』の男達ですら、観測基地を放棄したのだ。

唯一の竜の飼育例は、比較的性情の穏やかな地竜だ。移民直

後には、家畜化した地竜を乗り物として常用していた。けれど道路も整備され、海路も安定した今では、催事に使われるだけになっている。

「では、貴殿の国は、どちらの国とも交流なく、今日まで来たというのか？」

「完全な独立採算制を採っている。我がここを訪れたのは、高原王が、我が領土を何の前触れもなく訪れたからだ。滅多になることだが、領海侵犯をするものが無きよう、ご配慮願いたい。そのためにも、我が領土をこの国のコンピュータに、覚えさせて欲しい」

「いや、前触れも何も、そんな国があったことすら知らない。いずれ、調査させてもらうことになるだろう」

天人はますます好奇心を強くした。独立採算制というのが気になる。『北青王国』もここ数年、イブのとつた鎖国政策のせいでほとんど交流のない国だった。けれど物資の交流などは、細々と行われていたのだ。

そういう交流すらない新しい国の登場は、簡単に容認出来るようなものではない。各諸島の議員による合議制で、この国は成り立っているのだ。この新しい国を認めることで、同じように諸島に独立宣言などされてはたまらなかつた。

「まずは、貴国のコンピュータと、我が国のアダムとの交流を望みたいのだが」

天人の提案を、アスマは嘲笑う。

「我々は、コンピュータなどに依存していない。すべての管